
行政改革に名を借りた破壊

投稿: 充 さま

小さな政府、行財政改革が事務と人の心を破壊している。事務上の単純なミスと、メンタル職員の増加がそのことを如実に物語っている。

発端は、明治政府以来の借金財政のつけが回ってきた挙句の財政難である。財政難を理由に組織の縮減と人員の削減が際限もなく進む。あたかも組織を減らすことと人減らしが最善のように語られ、信じられ、これでもかこれでもかという風に縮減と削減が続く。

果たして、今行われている縮減・削減が自治体、住民、職員にとって本当にベストであろうか。組織の見直しと人員削減を公約に掲げ当選する首長も多いし、それが選挙民の絶大な指示を受け続々と当選を果たす。この側面からすると、組織の見直しと人員削減は、民意として絶対的な正しさを証明しているかに見える。無駄や不要不急の施設などが存続したほうがいいとは誰も思わないが、組織の見直しと人員削減を錦の御旗にして、必要な出先機関や人員を機械的に削減するのはいかがなものかと思うし、類似の自治体と比べると多いなどという縮減・削減競争になってしまっていることに対して危惧を感じるものである。

私は、長年地方自治体の税務の職場に身を置いているが、組織と人員の削減の煽りを受けて、本来の仕事ができなくなりつつある現状を目の当たりにすると、黙して唯々諾々と組織の見直しと人員削減を見て見ぬふりをしていることは、最早、限界に達しつつあると考え問題を提起しておきたい。

組織の縮減には、必ずと言っていいほど、住民の利便に十分に考慮しつつ実施するという耳触りのいい条件が付けられるが、これは殆どがリップサービスで、その実態たるや住民の負担増に他ならない。もちろん組織が縮減されたからと言って、税金は安くなるから住民にとって財政改革でも利便への配慮でもなんでもなし。単なる住民の負担増による財政悪化の進行防止策に留まる。

また、人員の削減により余裕がなくなり、年休を十分に取れない職員が増えているし、何よりも問題なのは、賦課徴収の公平を維持するために組織として身を呈して解決すべき事柄が放置されたり、日常業務としてこなすべき事務の遅延等の事態も発生している。

日常の事務においても、本当に恥ずかしい、組織としての一体感を失いかねないミスが発生している。文書の発送ミスによる個人情報漏えいや、プログラムミスやチェックミスによる大量の文書作成ミスなどである。これらのことは、二重にコストが掛かるのみならず、漏えい文書の回収、謝罪などに正常に文書が作成された場合の十倍以上の手間暇と日数を

費やすことが珍しくない。総てをフォロー収拾した後の疲労感と無力感は、組織というものへの深い失望と疑念の影を落とし、例えようのないものがある。

これは、電子計算機の導入と引き換えにそれに見合う人員の削減をした結果、点検と読み合わせなどのミスを防ぐ人員と事務文化を失った結果のつけである。

忙しさに拍車をかけているのが、実績主義だ。とにかく実績が求められる。きちんとした業務分析に立脚していない実績評価は、職員がしぶしぶ自分を言い聞かせていても、根幹のところでの不信感を拭い切れない。

職場がなくなることへの不安や業務の多忙、実績評価への不信などが重なり、ストレスに苛まれ、心身の不調に陥るといった悪循環は進むばかりだ。

住民のサービス向上に名を借りて組織を減らし、実はその負担を増し、業務分析を行うことなく実施される職員の削減と評価は行政改革ではなく、単なる吝嗇、行政の破壊である。

組織の見直しと人員削減は、単なる組織の縮減ではなく、ましてや自治体間競争でもなく、綿密な業務の分析と評価に基づくものでなくてはならないと思う次第である。